

日本ボーイスカウト北海道連盟だより 151号



# 斧の響き



子どもたちから「ありがとう」と、  
声をかけられることを夢みて・・・

ボーイスカウト北海道連盟  
理事長 長岡 正彦



毎年実施しております全道スカウティング研究協議会も本年で57回を迎えました。

ここ数年は参加された指導者の皆さんが、スカウトへのお土産として、フィールドに出てプログラム展開の一助となるように、ドラえもんポケットを膨らませる実技体験のプログラムをいろいろ工夫して提供しております。

ただ、残念ながら参加者数も減少してきており、どうしたら多くの指導者の方たちに参加してもらえるのか悩ましい状況となっています。

9月末の北海道連盟の登録数は、スカウト718名、成人指導者709名で計1,427名となっております。しかし、本年も100名近い子どもたちがスカウト活動に新規に加盟をしております。

この新しく入ったスカウト、また部活動や塾、習い事が沢山ある中で活動を辞めずに頑張っているスカウトたちのために、ドラえもんポケットに沢山のお土産を詰めてお帰り頂きたいと思っております。

さて、本年のノーベル賞の日本人受章はみなさんご存知の通り、医学・生理学賞に大村先生、物理学賞に梶田先生が選ばれました。

大村先生は土の中の微生物から毎年何億人という人々を救う薬を創り出しました。一方の梶田先生は小柴先生の発見したニュートリノに質量があることを証明いたしました。

大村先生は、小さい時から「世の中の人に何か役に立つようになれ」と言われて育ったそうです。また梶田先生はテレビで受賞のときに、ニュートリノに質量があることを証明できたことが、「人の世の中に何の役に立つかわからないけど」、と言っておられました。

私は、このように今回の日本人受章者のお二人は、現状に満足せず常に前に向かっていく人だと思えました。

私たちが現状に満足せず、子どもたちが笑顔あふれるスカウト活動ができるように邁進していきたいと思えます。



ノーベル賞を受けることは到底無理ですが、何年後に、昔、共に活動していた子どもたちから「ありがとう」の一言があるかも知れません。その日がくることを夢見ながら、一年後の全道研でお会いしましょう。

〔平成27年10月24日第58回全道スカウティング研究協議会 理事長所信から〕

## 国内で異国を体験 ～23WSJ報告～

北海道連盟派遣隊 隊長

北海道連盟コミッショナー 清水 義明

率直にジャンボリーの感想を言えば「ものすごく、楽しかった!!」。でも正直言って世界ジャンボリーに圧倒されました。

「世界ジャンボリーとは言え、日本国内の開催だから」と、高をくくっていましたが、それは大きな間違いでした。私たちを乗せたバスが、会場のメインゲートをくぐり抜けたとたん、交通誘導をしているスタッフは、どこかの外国人。ウエルカムセンターで到着受付（チェックイン）をしようと、勇んでバスを降りカウンターへと向かうが、別の国に来たかのような錯覚を・・・日本語が通じる人はどこ？到着早々世界ジャンボリーの洗礼を受けました。

サイト到着後、いつものようにSC本部へ向かい各隊への支給品、貸与品等の受渡しや、コンテナヤードから野営資材の荷下ろしなど、37名が分担して隊として初めての共同作業が始まり、設営に要した時間は約2時間半、支給されたタープテント4張りの設営に多くのスカウトが取りまき苦戦していましたが、「風が吹きあおられる、ピンペグが弱く利かない、張り綱が長すぎる・・・」などという。経験を活かして工夫してごらんなさいよお～。

23WSJ参加にあたり（他の大会なども同様ですが）、参加条件の“大前提”は「スカウト精神や技能、日常の“しつけ”が、しっかり身につけていること・・・」だと思います。

ビーバー、カブ、ボーイスカウトと活動を続けてきた中で、野営技能、不自由や困難を工夫すること、人への思いやり、けじめをつけること、自然を大切にすること、来たときよりも綺麗にして帰るなどの“しつけ”が、体験学習として繰り返され身に付いているはずです。

これらを身につけてこそ、日常のスカウト活動はもとより、こうしたジャンボリーのような大きな大会を存分に楽しみ、自己の大会参加の目的が達成できるものだと思います。

ボーイスカウトは世界的なものであることは、関係者の誰もが常識として知っている。しかし、日本国内だけの活動では、世界を感じる機会が少ない。せいぜい「B-P祭」くらいかな？

ジャンボリー会場には、加盟するほとんどの国から約34,000人が集い生活を共にしていました。小さな“地球村”の住民であった期間中、様々な国のスカウトや指導者と挨拶を交わし、「世界スカウトの一員」であることを実感したと思います。

私は、閉会式での世界スカウト機構 事務総長 スコット・ティア氏のメッセージがとても印象に残っています。

『共に、スカウトは世界を変えることができる』ジャンボリーに集うスカウトが国家、人種、言語、文化、宗教などの違いを理解し、テーマである「和」の心でスカウト仲間と生活することで、平和が永続することが可能であると世界に示すことが出来た・・・。私たちの使命である平和のメッセンジャーであり続け、地球市民として活発に生活し続けましょう」と、この機会に世界スカウト機構が示すテーマ「Creating a Better World」（よりよい世界をつくろう）の意味を考え、平和への取り組み「Messengers of Peace（メッセンジャーズ オブ ピース）」など、世界的な活動に視野を広げていきましょう。

- \* 「〇〇班は、みんな仲が良い」というが、『チームワーク』と『仲良し』は違う。
- \* 「野営生活に不自由なし!」「不自由があったら改善しよう!」ではなく、『野営生活に不自由あり!』『不自由があったら順応しよう!』ではダメよ!
- \* 外国スカウトと“交換”できた!というが、ワッペンやチーフリング、スカーフ、記念品等の「交換」じゃないの?『交歓』とはちがうよ。本当に外国スカウトと『交歓』できたのかな?
- \* 「毎朝の点検」「点検講評」「優秀班表彰」「朝礼」って、日本隊くらいかな?
- \* 「世界ジャンボリー」って、「日本ジャンボリー」とは全く違った。この2週間は「夢のような時間」だった!「愉快的時間」だった!「世界のスカウトの一員である」と感じた!

## 世界の人々にムックリ体験を提供 ～23WSJ/I ST報告～

23WSJの選択プログラムカルチャーモジュールで北海道連盟は、アイヌ文化振興・研究推進機構、アイヌ民族博物館の協力を得て、「アイヌ文化紹介とムックリ体験」を提供しました。

I ST [International Service Team : 国際サービスチーム] 参加者からの報告です。

北海道連盟釧路第6団カブ隊長  
山下晋一

カルチャーモジュールには、65のブースが出展しており、スカウトは国内ブースと海外ブースを一つずつ体験することが求められていました。

北海道連盟のブースでは、ムックリ体験やイランカラプテのパンフレット等を配付してアイヌ文化の紹介。数多くのスカウトたちがアイヌ文化を体験し好評でした。

会場にはバーデン・パウエル卿のお孫さんご夫妻もご来場されました。



- ★ WSJの運営は、NJの延長線上で日本連盟が主体で運営するものと思っただけでしたが、全く違って世界連盟が主体となって各国から来たスタッフが中心となって運営をしていました。そのため開会式、大集会、閉会式の使用言語も英語とフランス語が中心でした。字幕には日本語はありませんでした。
- ★ I STだけのオープンセレモニー、クロージングセレモニーも開催され、世界から集まったI STメンバーの皆さんが手作りのもので、スコットランド民謡でのダンスやアイルランドの方々の歌や踊りがあり、とても心温まるもので、スカウト以上にこのWSJを楽しもうと一生懸命盛り上げてくれていました。
- ★ WSJは数多くのI STのスタッフの支えの中で成り立っていることを強く感じました。  
全世界から高額な参加・旅行費用を払って、熱暑の中でトランスポート部門やセーフティ部門などの様々な部門に所属し、真っ黒になって汗だくになって頑張っていた姿がとても心に残っています。  
高齢の方々も数多く参加されていて、アメリカの方は約44年前に日本で開催された世界ジャンボリーにスカウトとして参加され、姉妹関係にある松山でホームステイしたことを覚えているそうです。  
今回彼はカリフォルニア州からI STメンバーとして参加を初めてされたそうです。奥さまと開会の1週間前に日本に来て観光で九州を回られ、奥さまが帰国後にWSJに参加されたそうです。
- ★ こうした各国の数多くの皆さんのボランティアで次世代を担う青少年へのボーイスカウト活動の支援がなされていることを改めて感じ、できれば次回のアメリカでの24WSJにI STメンバーで参加して、今回の23WSJでいただいた各国からのご恩にお返しができたらと思いました。

# 23 to 25 July 2015

## 23WSJ UK66 Home Hospitality

23WSJに参加した英国スコットランド&ハイランド地方のスカウト・指導者40名〔ユニット66隊〕を7月23日（木）～7月25日（土）に20世帯がホームステイで迎え入れをしました。

7月23日（木）17時30分に新千歳空港ターミナルでホストファミリーに引渡し、7月25日（土）10時、新千歳空港ターミナルでお別れまでの2泊3日、それぞれのドラマがありました。ホストファミリーから寄せられた感想文から“ドラマ”の一端を紹介します。

### ★ 市内観光

豊平神社／北海道神宮／頓宮／寺院／北一条教会  
藻岩山（夜景）／幌見峠・ラベンダー園／モエレ沼・海の噴水／ノースサファリ／テレビ塔  
札幌駅／JRタワー／大倉山・ウィンタースポーツミュージアム／大通ビアガーデン  
有珠山火口、洞爺湖・足湯／池田町の有名な所

### ★ 見学、買い物、遊び、体験

スカウトが通っている学校（中学、高校）／高校で弓道部の練習／ホストの職場  
大型商業施設アリオ／スーパー（夕食購入）  
家の前・スカウトと花火／ビーバー・カブスカウトと交流／スカウトハウス、

琴演奏／時計台でチェロのコンサート／カラオケ／バグパイプ演奏（スコットランドから持参）  
書写・習字／近所の公園でサッカー／餅つき



### ☆ 食事

#### 〈好んだもの〉

回転寿司：メニューの「ツナ」は馴染みがある、  
鉄火巻を見て驚いていた  
ファンタにメロン味があることを知って感激していた  
居酒屋（おにぎり・から揚げ・ラーメンサラダ等）  
ジャパニーズレストラン・和食、

バーベキュー（ホストファミリーの庭、スカウトハウス）

味噌汁／バイキング、餃子／つくね／カレーライス

家族でホットプレートのお好み焼き／きんぴらごぼう

豆腐ハンバーグのてりやきなどしっかりと味付けされたもの

手巻き寿司は色々巻いて食べてくれました／流しソーメン／自宅でゆでた蕎麦

ハチミツをかけて甘くしたフレンチトースト（自国では、甘くない食事感覚のフレンチトーストが主流だと教えてくれた）

色のついたご飯!?（醤油をかけてみたらしい）／中学校の給食／朝食の卵焼きと焼いたサーモン

朝食はロールパン、カリカリベーコン、ウィンナー、サラダ、シリアルです（安心した顔で、今までで一番食べていました）

#### 〈好まれなかったもの〉

麦茶は珍しいらしい、水道水をよく飲んでいたので生のトマト／冷やっこ

朝食のTHE和食「ごはん、豆腐とわかめ味噌汁、納豆、たらこ、だし巻き卵、鮭フレーク」を食べてみてくれていましたがやはり難しいようです

朝食のオールジャパニーズフードで定番の梅干は“すっぱい”、納豆は“くさい”と不評。

## ★ 興味を示したこと

- ◇ 七五三のお参りで晴れ着姿の男の子、女の子に出会い一緒に写真を撮った。
- ◇ ビアガーデンで流れた「蛍の光」に感動している様子だった。
- ◇ お寺の本堂で仏教の装飾にとっても感銘をうけたよう
- ◇ 高校見学
- ◇ 書写・習字



## ★ エピソード

### ～風習～

- ◇ 食事の時に折角なので、お箸を使ってもらおうと補助道具を用意したが、既に練習していたようで上手に使えていた。
- ◇ レストランで小上がりに案内されるとさっさと正座していたが、床に靴が無い？ああ…履いたまま、やっぱり！(笑) 声をかけると「そうそう忘れていた」とばかりに脱いでくれたし、この後も玄関で靴を脱ぐことが当たり前になっていた。
- ◇ おそらく、～日本では玄関で靴を脱ぐ～という習慣を勉強してくれていたのでしょう。ただ、ちょっと早かった…玄関ポーチで靴を脱いで居ました(笑)、日本の住宅には、エントランスからポーチがあり、玄関、あがりがまちという造りがあるのが 判り辛いんだなあと思いました。
- ◇ 寺院の本堂で彼らが畳の上に正座してしずかに祈る姿はなぜかとても絵になっていた。



### ～生活～

- ◇ 大型店舗に行き、日本のメーカーの靴もスコットランドで買うよりここではかなり安いと感動していたり、甘いお菓子を買って、「これおいしいの？自分の国に似た感じのものがあるって、好きなんだけど、これも期待できるかなー」などと、見ていてほほえましい
- ◇ 食事をしている店の常連さん達が「ビートルズ」の曲をカラオケで歌っていると、「この曲知ってるよ！」「じゃあ歌ってみて！」とマイクを渡され、カラオケを少し体験してもらうことも出来ました。

### ～活動で～

- ◇ 当日中学校は終業式という事もあり、昼休み後の終業式で全校生徒の前で体験入学の感想をステージに上がって述べるという演出が用意されていましたが、スコットランド隊の制服を素敵に着こなし、臆することなく堂々と自分の意見を述べている姿は、とても頼もしく感じました。
- ◇ 5時になるとカブが到着。自己紹介・焼肉のあと、スコットランドの集会でやっているダンスを教えてもらい、二人の歌を披露し、彼らの友人が作った「山口の歌」はカブも気に入って一緒に歌っていた。
- ◇ プロディとルーベンが拘っていたのは、この集会でスコットランドの伝統を伝える事。みんな制服に着替え「友情の杯」のプレゼンをすると、最後はお土産のショートブレッドを分け合って食べその意味を噛みしめた。
- ◇ ゲストの二人は自己紹介のためのミニアルバムを持ってきてくれたので、家族や家の写真を見ながら故郷の説明してもらい、楽しい時間を過ごすことができました。
- ◇ 2人とも日本に来る前にたくさん準備をしてきたようで、家族やスコットランドのボーイスカウトの様子の写真を見せてくれたり、母親から感謝のメッセージを書いたカードをもらったり、スコッチウィスキーなどたくさんのお土産までもらってしまった。

### ～言語～

- ◇ この位の年齢のスカウト達には、あまり言葉の壁という物はないのでしょうか。
- ◇ 二人を千歳空港で見送った後、我が家のスカウトが「英語が話せるようになりたい・・・」と呟いていたのが印象的でした。
- ◇ この3日間を通し、私があれこれ知っている限りの英語で交流するよりも、英語がわからないが子供同士の方が通じあえているような気がしました。
- ◇ 名前に漢字をあてて欲しいと願われたので記念ですので書きました  
洲子戸 大具楽巢 [Scott Douglas]  
譲 脚武留 [John Campbell]

### ～ゲストは～

- ◇ 二人とも14歳、15歳には見えないほど大人っぽくて、私は最初「高校生位かな」と勘違いしてしまうほどでした。
- ◇ エミリは髪を青と赤に染めて、顔にピアスをつけ最初は少し驚いたが、話をしてみるとこの秋から獣医養成コースで学ぶ予定のしっかりとしたいいい子だった。
- ◇ 2人ともとても礼儀正しく、自分の考えを気持ちよく話し、日本の大半の同じ年の子供達に比べると見た目だけでなく、態度も大人っぽく自立しているように感じた。
- ◇ ゲストはとてもフレンドリーで身ぶり手ぶり片言英語で過ごした3日間
- ◇ 日本語（どうもありがとう、どういたしまして、おはようございます、おやすみなさい等）を使おうと努力したり、食事もなるべく食べるよう努めていました。  
出発前夜には私達家族に「折鶴」を折ってプレゼントしてくれたり、最後の最後まで感謝の言葉を述べてくれました。
- ◇ 千歳から我が家へ向かう車中、私は運転に集中し、同行した次男にはアプリを手渡しなんとかコミュニケーションを図るも、すぐに会話は終わり、無言状態…  
アンドリューはカメラ少年らしく、色んな景色を撮影していました。  
そして次男は、2人の香水の匂いに、車酔いをする始末。

### ★ ホームステイを通じて～

- ◇ 彼らと過ごして感じたのは、彼らは国を愛し、誇りを持っていて何よりも快活である事だった。  
所属の違う二人がコミュニケーションをとりそれぞれを尊重しながら前に進む姿は清々しく、素晴らしい出会いを頂いたことへの感謝の気持ちで一杯になった。
- ◇ もっと英語を勉強しておけば（翻訳ソフトを使いこなせていれば）、もっと相手国の地理や歴史や文化を勉強しておけば、もっといろんな所へ連れて行ってあげれば、もっと美味しいものを食べさせてあげれば…と反省ばかりが思い浮かびます。  
この3日間でスコットランドが大好きになり、気がつけば彼らの健康や幸福を願ってしまいます。
- ◇ イギリスの学校は夏休みが6週間でその間はゆっくり休みをとり、学校ではできないさまざまな体験をすることが奨励されている。



彼女達もこの夏19日間日本で過ごし、帰ってからまだ夏休みが続く。日本の中高生は休みといえども山積みの宿題や課題がだされ、ほとんどの子供達は部活で毎日のように学校に通ったり、塾に通って過ごし、おまけに休み明けにはテストが待っている。

休みに対する社会的な認識がまるで違う。

格差社会といわれるなかで今の日本の子供達の競争的な環境は以前より厳しく、とても窮屈になっているように感じる。日本の子供達にも、もっと自由な時間が増えて自律した体験をとおして柔軟な考えや広い視野を持てるような寛容な社会になってほしいと願う。

ボーイスカウト運動はブラウンシー島のキャンプから始まった  
**「The first camping」**  
**＝ボーイスカウト部門年齢幅の拡大へ向けての実験キャンプ＝**

ボーイスカウト運動はスカウト自治の活動を提唱していますが、実際は班制教育・個人責任・友情交流・個人の熱意がおざなりになっているのが現実です。

この現象は決してスカウト個人に責任は無く、スカウティングというジャンルの教育を提供している指導者に大きな問題があります。

スカウティングは最終的に個人の成長を促すために、班のスカウト間で討議し考え、準備し、実行することにより、仲間意識・役割分担・評価反省から今後のスカウト運動への展望を自治グループで考える力を養っていくことが重要なことでもあります。

よってこの事業（実験キャンプ）では、スカウト達が班あるいは個人で考え行動し仲間との友情を深め、リーダーシップ・メンバーシップを育みます。

また、この事業ではスカウト達の企画力を養うことを主な目的とし、野営技能、炊事技能の涵養を意図しません。

**《コンセプト》**

この実験キャンプはスカウト達が会期中の活動プログラム、生活規範を班・個人で考え、自分たちで生活・友情を作り上げていくことを目的とし、班単位でのプログラム企画を通じて個人の「考える力」を育み、社会生活で生き抜く力・能力を養います。

運営スタッフ（指導者）は、スカウトのリクエストに応じた支援を行います。

**《テーマ》**

「友情と協力により良い北海道をつくる」

I make better Hokkaido with the friendship and cooperation

**《開催状況》**

期 日	8月9日（日）～13日（木）	
会 場	ボーイスカウト旭川地区野営場	
参加スカウト	16名	BS：12名/V S：4名
ス タ ッ プ	運営：4名	奉仕：4名

**《基本日課》**

06：00	起床・洗面・清掃
07：00	朝食
07：30	点検
08：00	点検講評、朝礼、スカウツオウン
	モーニングゲーム
08：30	午前のプログラム
12：00	昼食
13：00	午後のプログラム
17：30	国旗降納
18：00	夕食
19：00	交流(入浴・ファイア等)
21：00	班長会議 ⇒ 班会議
22：00	消灯

### 《日 程》

日	天気	期日	時間	主な内容
1日目	曇時々晴	8月 8日	13:00	運営スタッフ入場
2日目	曇時々晴	8月 9日	14:00	参加者入場(班編成・設営) 班プログラム企画・計画・準備
3日目	曇時々晴	8月10日	8:00	開会式/プログラム (班単位での行動)
4日目	曇時々雨(雷雨)	8月11日	8:00~終日	プログラム (班単位での行動)
5日目	曇時々雨(雷雨)	8月12日		
6日目	曇時々雨(雷雨)	8月13日	8:30~12:00	プログラム、撤営
			13:00	閉会式・退場

### 《各班のプログラム》

期日	アリ班	猫班
8月 9日	設営・計画書作成	設営・計画書作成
8月10日	テーマ:「ウッドクラフト」 内 容:班サイトの整備 タープ、ゴミ捨て場、炊事場、 薪割り場、立ちかまど、物干し場等	テーマ:「ウッドクラフト」 内 容:班サイトの整備 タープ、ゴミ捨て場、炊事場、 薪割り場、立ちかまど、物干し場等
8月11日	テーマ:「野外スポーツをやる」 内 容:パークゴルフ	テーマ:「サイクリングを楽しもう」 内 容:サイクリング、東神楽町の探索
8月12日	テーマ:「ロープの技能を高める」 内 容:すじかい・角しばりの修得 パイオニアリング (信号塔)	テーマ:「温泉の水質と工夫について知ろう」 内 容:花神楽温泉のお客さんに対しての 工夫の調査 (インタビュー形式)
8月13日	撤営 (撤営の方法)	撤営 (撤営の方法)

### 《隊・団、地区で実践のヒント》

4拍5日の「The first camping」から、様々な課題が見えて来ました。

反省・評価事項から隊・団、地区での豊かなキャンピングを実践するヒントが見えてきます。

#### 《基本日課 評価・反省》

◇ 運営にあたってのサポートは、「ボーイスカウト部門の年齢幅の拡大へ向けての実験キャンプ」ということから、スタッフ⇒ベンチャー⇒班長⇒班員といった指示に沿って行った結果、スカウトの経験・知識・技能の面で不足している部分が多く見られた。

今後、知識・技能については、実践を通してレクチャーしていく機会の必要性を強く感じた。特にベンチャーに対しての知識・技能の伝達の機会が必要であるように感じる。

◇ 初日に全日程のプログラムを各班で作成する計画であったが、次の日のプログラムを計画するだけで精一杯という状況になった。

逆に言うに行ったプログラムの反省を踏まえて次の日の計画に至ったこともあり、前日に比べ翌日の「目的」が明確になり、プログラムに大きな進歩があった。日々、具体的な課題を提示(考えさせる)することが必要であろう。

◇ 会期後半は不安定な天候であったため、雨・雷の対処法についても知る良い機会となった。

#### 《会期中の食事 評価・反省》

◇ 基本的に各班にてメニューの決定、買い出しを行うこととした結果、プログラムとの兼ね合いを考え買い物をする工夫が見えた。

◇ 期間中の食費とプログラム費を預け、領収書の受け取り、帳簿の記入を指示した結果、一部領収書漏れがあったが、参加年齢(小6・中1)を考えると評価したい。

◇ 質素なメニューであったが、ソーメン、焼き肉、豚丼、さんま、おにぎり、焼きおにぎり、サンド



イッチ、ホットドッグ等、工夫は見られたが、ボーイスカウト活動「節約」という観念が自然に養われているのか？または手抜きなのか？は意見の分かれるところである。

- ◇ スタッフの食事は、ベンチャーが用意してくれた。  
フレンチトースト、ピザトースト、焼きそば、焼うどん、さばの味噌煮、豆腐サラダ、麻婆豆腐丼、  
そーめん、たらこスパゲティー、味噌汁、野菜スープ各種、工夫されたメニューに驚いた。

#### 《全般について評価・反省》

- ◇ 設営について、知識・体力も影響しているのか分担作業が上手く機能していない。  
同様、撤営についても分担作業が上手く機能していないのは“場数が少ない”ためではなかろうか。
- ◇ 炊事について、経験・知識不足からなのか「質素」な献立のように感じた。
- ◇ プログラム企画においても同様、「目的」が明確にならないため「・・・をやる」というプログラムになりがちであったが、期間中には目的を明確に持つ進歩があった。
- ◇ チームワークについては苦勞していたようだが、現場の様子、スカウトの感想文からも毎日、努力している姿が見えた。
- ◇ 今回のベンチャースカウトは、知識・技能もある程度持ち合わせていたこともあり、適切なアドバイスをしていたように感じるが、ボーイ年代に適切なアドバイスをするためには、ベンチャー年代の知識・技能を高める場が必要に思う。
- ◇ 奉仕参加していたベンチャースカウトそれぞれが、自らの課題に応じて技能章に挑戦していた。
- ◇ 今回参加のベンチャースカウトから「ベンチャー年代での実践を通じた研修」「今回のようにボーイ年代と共に行う実践を通じた事業」がベンチャーのスキルを高めるためには効果的であるとの見解が示された。

#### 《今後の展望》

- ◇ スカウト達の様子、感想文からも経験・知識・技能面の不足を感じられる。  
隊・団のみでの活動では自ずと限界があり、複数班形成できる中での経験する機会を与える、地区、地域での合同キャンプの重要性が認識された。
- ◇ 高校生年代において、ジュニアリーダーとして上級班長、隊付の任務を熟していく上では知識・技能を実践で取得していく必要があり、ベンチャースカウトがスキルアップをする機会を提供しベンチャースカウトの重要性の見直しが必要に思う。
- ◇ 12歳～18歳の部門になった時の高校生年代独自のプログラムのあり方を検証する。
- ◇ 指導者⇒ベンチャー⇒班長⇒班員の伝達ゲームをすることにより、全てのスカウトが知識、技能を取得する機会ができることが実証された。

#### 《スカウトの感想文から～一部抜粋》

- ☆ チームワークは少し良くなかった。周りを見られなかった人や、がんばろうとして空回りしたり、イライラしたりした人もいたが、周りを見て気づかいをした人もいた。
- ☆ 自己中心的な行動が多かった。責任をもって行動してほしかった。ですが、すぐに仲間になじんでいく事ができたのは良かった。
- ☆ 同じ年でも上下関係があったので、次からは班長を中心として行動したい。
- ☆ 班長として指示をするより自分が動いてしまった。このキャンプでチームワークの大切さがよくわかった。
- ☆ みんなにきつくあたった。流れをわからない時があった。
- ☆ テント、薪割り、タープの配置は良かったけれど、たちかまどの配置と結び方が悪かったため不便になってしまったが、最後はみんなの協力により組み直し、見事使えるようになった。
- ☆ 後半のプログラムで、雷や雨のアクシデントがあり、その上の行動をちゃんと考えたりしていた方がいいと思いました。
- ☆ プログラムで計画表に従い「やらなければいけないこと」「やってはいけないこと」を見分けてできるようになり、かなり良かった。
- ☆ 初めての体験が多くて良かった。やるべきことはすべてできて良かった。

# 平成27年度北海道ベンチャー・トライアルキャンプ

## ～自分のカヌーは自分で漕げ！～ 地域力を生かして

過去2年のトライアルキャンプでは「アイヌの生活文化に学ぶ」〔白老町：アイヌ民族博物館〕「縄文文化を通じ“食べ物”考える」〔伊達市：北黄金貝塚公園〕ことにより、自然と共に生きる素晴らしさを学び、実体験してきました。

その中で参加したスカウトにとって、野外技術の幅とそれぞれの視野を広げる機会となりました。

27年度はベンチャースカウトの企画力実行力をもとに、それぞれが主体的に達成したいベンチャープロジェクトの課題を持ち込み、実践し、交流することにより、参加スカウトの総合的な力を高めることができるキャンプを提案します。

テ ー マ	～自分のカヌーは自分で漕げ！～ 地域力を生かして	
期 日	平成27年9月20日(日) 13:00～23日(水) 13:00 3泊4日	
会 場	旭川地区野営場(東神楽町25号忠栄) /各プロジェクト実施場所	
参 加 者	ベンチャースカウト：6名〔4地区〕	
奉 仕 者	成人指導者：8名、ローバースカウト：2名	
宿泊・食事	宿泊：野営・個人宿泊。食事：食材購入も含め自己手配・調理	
プロジェクト	テ ー マ	目的・目標・内容
	高度な野外活動	その土地、場所に合う釣り方を見出す。 ダムに生息する魚を調査。釣った魚の調理法を知る
	三浦綾子の世界観	小説の舞台になった場所を訪ね、そこから得られるものを文章にして、自分自身に文才を高める
	旭川の野外彫刻めぐり	100カ所以上あるといわれる野外彫刻を可能な限り回り、記録を取り観察・考察して彫刻に対する造詣を深める
	教えてくれた動植物たち、 今と昔の北海道の違いを	釣り、ツリークライミングを通じて、旭川の自然を学び 富良野(居住地)の自然を考える機会にしたい
	私たちが知るべき アイヌ文化とは	北海道の先住民族であるアイヌの衣・食・住について知り理解を深める
	旭川を知り 自分たちの町を知る	旭川市内を探索して、その結果を自分たちの町と比較して互いの街を知る

### 《概要・評価》

個々のスカウトが事前に提示されたプロジェクトテーマ例示を参考に、自分の取り組むプロジェクトに挑戦する。

プロジェクトの計画について、スカウトの理解不足や所属隊指導者の認識不足？か、事前準備の濃淡が大きく、プロジェクトを進めて行く中で準備不足を痛感したようだ。

会期中、毎日夕食後に交流会、ミニフォーラムが行われこの時間はとても充実した時間となり、後半の2日間はスカウトの意識に著しい変化が見られ、活発な意見交換が行われた。

〔初 日〕自己紹介：今回のキャンプにおける各自のプロジェクト発表

〔2日目〕学習会：ベンチャープロジェクトについて

ミニフォーラム：ボーイスカウトが社会に認められるには

〔3日目〕キャンプファイヤー、報告書作成準備

参加した6名のベンチャースカウトは充実した内容・時間を過ごすことができたと思われる。

特に、今回は3月の「アフターフォーラム」と繋がり、効果的に開催することができトライアルキャンプは3年目であるがこのような従来のボーイスカウト活動の枠組みを超えた、新たな試みをする事業について認識し理解を得るのに時間のかかる組織体である。

《参加スカウトのレポートから》

テーマ	教えてくれた動植物たち、今と昔の北海道の違いを
考察	<p>野営場の東川町は旭川近郊にあり、居住地と自然が上手く調和した町であると思う。</p> <p>昔からみれば緑は減り、魚などの生息数も減ったであろう。だが、東川町は北海道の中でも自然を留めている地域だ。街の中にも緑が多く、釣りを行った川の周囲はほとんど手付かずの森が残っており、これが動植物の住み処となり豊かな生体系が昔から今へ引き継がれているのだろう。</p> <p>ダムなどの影響で魚が生息しづらくなる中、ここは木々が多いためそれだけ養分や虫などのエサが多く生息数減少を食い止める一因であると思う。</p> <p>また、東川町の周辺では稚魚の放流が行われており、釣りをしている時も小ぶりの魚が多く見受けられた。</p> <p>反省点はもっと植物を観察し植生の変化も考えるべきであった。</p> <p>富良野では市街の緑が多いとは言えず、川沿いでは護岸工事が行われ、魚の生息場所が減っているのは確かだろう。北海道観光地としての富良野を今後も守っていくためには、まず環境の保全から始めるべきであろう。</p>
評価・反省	<p>全体的に計画の詰めが甘かったので内容も詰めの良いものとなってしまった。次回は、早くから計画書を作成し、的確な目的・目標をもって行動できるキャンプにしたい。</p> <p>時間について持て余していたので有意義に時間が使えるよう計画性のある行動ができるよう、こちらは日頃から意識して取り組みたい。</p> <p>今回のキャンプではボーイスカウトに対する様々な意見を聞く、普段行うことのできないプログラムに取り組む、などここでしかできない事が出来たのは今後の活動において大きな糧となるはずなので、この体験を無駄にせず、生かしてさらに次のステップを目指したい。</p>
行動・活動	<p>《9月20日(日)》</p> <p>13:00に現地へ到着。開会式やオリエンテーションが終了すると、キャンプ中の日程や目的、目標を話し合い、そのまま近場へ釣りに出かけ同行していたスカウトが大型のニジマス釣り上げていた。</p> <p>それを夕食として19:30から交流会をした。全員が顔見知りだったので若干の気恥ずかしさがあったが同時に安心感もあった。</p> <p>《9月21日(月)》</p> <p>朝の4:30に起床、5:00から活動を開始。野営場近くの忠別川にて6匹(ニジマス・ヤマメ・サクラマス)を釣り上げることができた。9:00頃野営場へ戻りこれを朝食とした。</p> <p>10:00からは人生初体験となるツリークライミングを行った。大きな木にロープをかけて自分の力だけを使い、高いところにつるされる感覚はとても開放的でリラックスできた。</p> <p>19:30から学習会及びミニフォーラムを行った。テーマは「ボーイスカウトが社会で認められるには」である。かなり煮詰まった内容となり、これで終わりではなく、これをきっかけに様々な形で意見交換を行い、ボーイスカウトとしての活動を活発にしていきたい。</p> <p>《9月21日(月)》</p> <p>4:30起床、5:00より活動を開始。野営場から離れた岐登牛山麓の川で9匹(ニジマス・ヤマメ)を釣り上げた。</p> <p>13:30頃野営場に戻り、昨日は釣った魚を調理中に焦がしてしまったことを反省し、今日は、少し火から離しゆっくり焼くことにした。</p> <p>2時間ほど弱火にかけると油が滴り、とても贅沢な夕食となった。</p> <p>19:30からは指導者によるキャンプファイヤーが行われました。出し物を自分で考え発表するキャンプファイヤーはめったにする機会がないので、貴重な体験になった。今後の活動に生かしたい。</p>

テーマ	私たちが知るべきアイヌ文化とは
評価・反省	<p>自分や周りの人に「北海道民として誇り」を持てるようにする。  ⇒ 私がまずアイヌ文化について知らないことが多くあり驚いた。簡単に「北海道民として誇り」とは言っただけではいけない思ったぐらい歴史が奥深かった。  アイヌ民族の自然に対する考え方は、今の私にも当てはまる部分がたくさんあった。私なりにアイヌ民族の考え方をまとめてレポートを作成できた。  関係者の方にインタビューするつもりでしたが時間の都合上出来ませんでした。事前に連絡をお願いするように心がけています。  タイムスケジュールを決める時は、もう少し余裕をもったものとし、素早く行動ができるよう、改善が必要だと感じました。  この活動のため、準備や片付けなど数えきれないぐらいの事をして下さった多くの人に支えられて楽しい活動が出来ました。これからもスカウト活動を今以上に頑張りたいです。</p>
活動記録・所感	<p>◇ アイヌ文化について軽い気持ちで考えていたが、プロジェクトを終えてアイヌ文化があるからこそ、今の生活があるという事を知ることができた。  縄文時代から続く文化であるアイヌ文化を大切にしていって、次世代に繋いでいくために木彫り、絵本、刺繍などの活動が私達の身近な所でも沢山あることがすごいと思った。  伝統を受け継ぐといっても目に見える技だけでなく内面的なものもあり、次世代の新しい波として守って作ったものには魂が宿ると考えている事がすごいと思った。  物を大切に神々に感謝し祖先を敬うアイヌ民族の考えを知ることが出来た。  ボーイスカウトのおきてには「スカウトは感謝の心を持つ」という言葉もアイヌ民族の考え方と共通しているなと思った。私も実践できるようになりたいと思った。</p> <p>◇ アイヌの住む家をチセという。屋根や壁は笹の葉で出来ていた。青々しい葉ではなく、枯れて麦色だった。チセに入ると、正面に大きな炉（アペ）が、正面には大き目の窓がある。正面の窓を神窓（ロルンプヤラ）という。  チセはアイヌ民族の風習が反映されている感じがした。神窓が今ある家にもそのようなものがあるのか疑問に思った。</p> <p>◇ アイヌにとっての熊は特別なものなのだと感じた。熊狩りは冬に行うそうである。寒すぎて雪がサラサラな頃、風が舞上がり、神秘的な光景が見られるようになると、山の神が誕生する。アイヌ民族のあいだで、山の神の誕生を口にする事はタブーで、心の中で考えるそう。  熊狩りに行き、親グマはその場で儀礼を行い、子熊は小さいうちは家の中で育て、女性が母乳を与えるそう。大きくなると檻の中で育て、1～2歳になると、母親の待つ神の国へ魂を送る。  熊に対する気持ちはとても不思議に感じた。神様が熊の姿をして現れるということなど身近なものを神としていたらしく、感謝の心をもっていたのだと感じました。</p>
ミニフォーラム	<p>今回のフォーラムでわかったことは、ボーイスカウトを発信する手段は、奉仕だけではないことです。  今まで奉仕を通して発信してきましたが、ボーイスカウトはボランティア団体という印象が付いてしまっていると思います。  私は、活動をしていて楽しく思うのは、奉仕ではなく、野外活動なので、野外活動を前に出して、ボーイスカウトを発信すべきだと思います。  具体的には家族とのキャンプとは違ったキャンプを体験することや火起こし体験などです。</p>

# 野口 聡一 宇宙飛行士の (ボーイスカウト・アンバサダー～親善大使～) お話を聞く会〔講演会〕と 北海道のスカウト交流のつどい

北見中央ライオンズクラブから、ボーイスカウト・アンバサダー（親善大使）を務めておられる、野口 聡一 宇宙飛行士講演会の案内をいただきました。

5月9日（土）午前10時から北見芸術文化ホールでの開催に全道各地から231名のスカウトと指導者が参加しました。

この事業の特色は、スカウトたちが野口宇宙飛行士のお話を直接聞くことができる（ビーバー・カブには少し難しかったようです）ことはもとより、全道各地から参加するためにはそれぞれの事情に応じて参加できるシステムで対応したことです。

5月9日（土）9：30開場、10：00～12：15の「野口さん講演会・野口さんとスカウトの交流会」のみ必須参加で昼食代のみ負担とし、他のプログラムはそれぞれの事情に応じて参加できるようにしました。

開場時間に間に合うように、北見圏外から参加するためには前日から移動、しかも平日のため、スカウトは学校、指導者は勤務を終えて時刻出発する団のために無料の宿泊所を提供し翌朝の朝食代のみ負担。

遠方から参加したスカウトたちのために「常呂カーリングホールでの全道スカウト交流カーリング体験」「ネイパル北見でのスカウト交流会、WTW・世界一周」などのプログラムを用意して、帰路の時間等に応じて、それぞれのプログラムに参加しました。

交通網や高速道路が発達したとはいえ、広域の北海道において今後の全道規模事業でのプログラム展開のモデルとなりました。

## 〔プログラム〕

期日	種別	プログラム	会 場	経費
5月8日(金)	A	前泊所提供	本覚寺／さくら幼稚園	宿泊料：無料 朝食代：宿泊者負担
5月9日(土)	B	野口さん講演会	北見芸術文化ホール	入場料：無料 昼食代：全員負担
		野口さんとスカウトの交流会		
	C	全道スカウト交流カーリング体験	常呂カーリングホール	施設使用料：道連
5月9日(土)	D	スカウト交流会	ネイパル北見	宿泊費：宿泊者負担 食事代：利用者負担
	E	WTW「世界一周」		



<p>危害から守る</p>		<p>思いやりの 心を育む教育</p>
---------------	---	-------------------------

<p>【セーフ・フロム・ハーム研修会を開催】</p>	
<p>11月22日（日）北海道ボーイスカウト会館で開催しました。 今回は、地区委員長・地区コミッショナー・常任理事・県連正副コミッショナーと日本連盟トレーナーが参加して、「セーフ・フロム・ハーム」の推進する背景要因、概念、今後の推進策などについて研修を深めました。</p>	
<p>プログラム1【課題提示：知っていますか！！ 子どもたちを取り巻くもう一つの社会】</p>	
<p>札幌市子どもの権利救済委員、小学校教頭先生、特別支援学級教員、児童会館指導員などをゲストに迎え、指導と体罰の違い、子どもの人格を傷つける言動、子どもの権利条約、子どもとは何歳まで、子どもたちが多くの時間を過ごしている学校、地域社会での子どもたちの側面、クレーマー等の実態、事例などについて課題提示を受けました。</p>	
<p>プログラム2【レクチャー：セーフ・フロム・ハームの考え方と推進】</p>	
<p>日本連盟木村事務局長より、セーフ・フロム・ハームの制定の経緯、概念・考え方と推進策等について伺いました。</p>	
<p>プログラム3【研究協議：セーフ・フロム・ハーム 私たちの務めは！？】</p>	
<p>セーフ・フロム・ハームを適切に理解し、ボーイスカウト運動の品質を高めるために、私たちの務めは何かについて研究協議を深めました。</p>	

### 【セーフ・フロム・ハーム の概念】

#### 《制定の経緯は》

「よりよい教育の提供と危害のないスカウト活動の環境を整えるために」「よりよい教育環境」を作っていくことが最も大きな目的で、世界スカウト機構が国際連合の「児童の権利に関する条約」採択と連動して2002年第36回世界スカウト会議で、Keepig Scouts Safe From Harm [スカウトを危害から守る] 決議を採択し、日本連盟では、平成22年にチャイルドプロテクションへの取り組みを始め、平成25年にセーフ・フロム・ハームの研究チームを作り、今年、3月の理事会で答申書を提出して、各委員会で具体的取組みについて検討を進めています。

#### 《子どもの居場所と危険要因》

子どもたちの居場所に必要な5つの条件の内、ボーイスカウトは5番目の包括的な意味で地域での役割担っています。

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| ①子どもにとって自治的な場所      | ②子どもが安心できる場所       |
| ③子どもにとって信頼できる人がいる場所 | ④子どもが生活者として成長できる場所 |
| ⑤子どもにも役割のある地域       |                    |

家庭では親が子に対する「虐待」、学校では、「いじめ」「体罰・暴力」、地域の中では「犯罪」が危険要因になっており、ヨーロッパでは、性犯罪、薬物、麻薬、HIV・エイズなどに児童が巻き込まれる危険要因があるが、我々スカウト活動の中では、「ちかい」と「おきて」があり基本的にはこういうことは有り得ないということを前提に考えてきました。

#### 《チャイルドプロテクションとセーフ・フロム・ハーム》

チャイルドプロテクションの基本は「大人がスカウト（子ども）をどうやって守るか」で、セーフ・フロム・ハームは「指導者と指導者」「保護者と指導者」「スカウトとスカウト」「指導者（保護者）：大人とスカウト」の関係を含めて「ちかい」と「おきて」をもとに、安全で安心できる活動、質の高い活動を目指すことです。

- ◇ 全ての指導者は、セーフ・フロム・ハームの考え方を理解し実践します
- ◇ 全てのスカウトは「思いやりの心」を育むためにセーフ・フロム・ハームを学びます
- ◇ 全てのスカウト活動に、セーフ・フロム・ハームを導入して、最も安全な環境を提供します
- ◇ セーフ・フロム・ハームの推進により、社会へのスカウト運動の信頼を高めます

### 《セーフ・フロム・ハームの推進》

5月に配付されたガイドライン（日本連盟ホームページにも掲載）「スカウトのためのセーフ・フロム・ハーム」「スカウトのためのセーフ・フロム・ハーム」「指導者のためのセーフ・フロム・ハーム」を具体的に推進するにあたり、「事件とする場合」「規定（登録、資格、抑止力）」「窓口の設置～問題発生時における組織的対応法～」などが課題となり検討を進めていく必要があります。

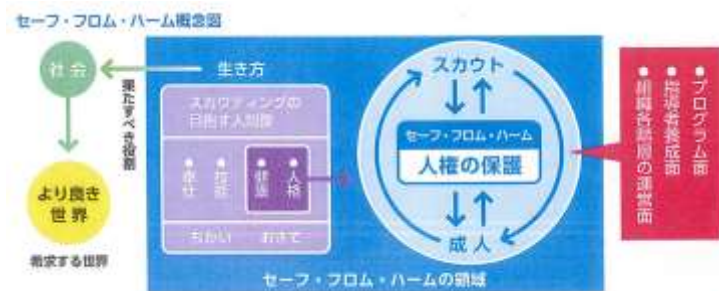
セーフ・フロム・ハームは、厳しいルールを作ってそれを皆で守るのではなく、我々のスカウト運動で目指す「ちかい」と「おきて」の人間像の4つの柱「人格」「健康」「技能」「奉仕」の内、人格と健康、心の健康をセーフ・フロム・ハームで守っていくことであり、実現・実施にあたり「プログラム面」「指導者養成面」「組織各階層の運営面」で取り入れて行くこととなります。

イギリス連盟やオーストラリア連盟では、日本のボーイスカウトと同様登録数の激減に悩んでいましたが、組織の各階層の運営面にこのセーフ・フロム・ハームの考え方を導入して、様々なことに透明性をもって実行し大人同士の関係を改善、適性な人を適性な箇所に配置することによる組織改革を行い、子どもたちを守る運動推進の「質」を高めるために、セーフ・フロム・ハームを運用して加盟員が著しく増加しています。

例えば、「虐待とは何か」を具体的に学ぶプログラム、地区コミッショナーにセーフ・フロム・ハームについてどのような取り組みをしなければいけないか、イエローカードといわれるチェックシートが示されており、もしも事象が起きたら正確に記録を残す、起こすべきアクション指針、通報先、解決にむけた手立てなど、24時間以内に対処しなければいけない厳しい内容が義務付けられている。

アメリカ連盟ではスカウトの発達段階に応じて具体的な性犯罪事例をもとにしたビデオ教材の配付などが行われている。

オーストラリア連盟では、青少年団体の指導者になるためには警察に届け出て少年に対しての犯罪歴のないことの証明書を発行してもらわなければならないことが法律



で決められている。

日本では、このような推進策は無理であるが、スカウトに活動の中でセーフ・フロム・ハームを展開する時に、スカウト教育において物事を「禁ずる」ということは難しいので、活動の中で自然に知ったり、学んだり、実行できるようにスカウトへ提供することの内容構築を各委員会が検討をしています。

### 《セーフ・フロム・ハームにより成し遂げていくこと》

事象が起きた場合、遭遇した場合の措置、予防的な知識、ルールをスカウトも指導者も身に付けて自分自身を守っていくことが基本であり、日常活動での思いやりの心を育むことにフォーカスして行かなければなりません。

子どもは大人ではない、未熟であるということ为先ず年頭に入れて、“ゆとり”をもった対応をしていき、「学ぶ」ということは「真似る」ということが基本で、スカウトは指導者を真似るわけですから、その手本になるように努めなければなりません。

事象が起きた場合、原因を自分に求める事が大事です。

確かに現実問題として他の要因で起きていることが大半ですが、他の要因でできていると考えた段階で解決方法がなくなります。人や周りの状況を変えない限り、自分が直面している問題が解決できないと思った瞬間に、自分で解決することを放棄したことに同じになります。

セーフ・フロム・ハームに該当する指導者の資質として、「子どもへの観察力」「コミュニケーション力」「家庭や地域の連携強化」「精神面のフォローの仕方」「人間性を高める指導法」が求められます。

#### 《セーフ・フロム・ハームの導入により》

- 思いやりの心を育む
- 知識やルールを身につける
- スカウトと自分（指導者）自身を守る
- 社会から信頼されるスカウト運動を目指す

= TOPICS =

## 北海道連盟章



新ユニフォームの制定にともない、県連盟章は各県連盟で作成することになりました。

北海道連盟章は「北海道の鳥〔タンチョウ〕」「北海道の木〔エゾマツ〕」「北海道の花〔ハマナス〕」をモチーフに

- ◇ 純白（の心）で気高く大空に夢・希望を唱える「タンチョウ」をシンボルに
- ◇ 天高く伸びる勇姿がスカウトを象徴する「エゾマツ」の緑を、ベース（地色）にして
- ◇ 純朴で野生的で大地に強く群生する「ハマナス」の淡紅色が、北海道のスカウティングの底力を支え
- ◇ 綺麗な空と海「青」に守られ、グリーンランドの北海道でスカウティングを展開します

### 23WSJの記録発行

「日本の中で外国体験 第23回世界スカウトジャンボリー 日本派遣団0401隊」＝記録と感想＝と活動記録写真を収録したDVDを発行しました。0401隊参加スカウトと所属団に送付しました。

## 第5回北海道・東北ブロック野営大会〔5HTC〕

〔会場〕福島県猪苗代湖天神浜（少年団日本聯盟第1回野営大会の地）

〔会期〕平成28年7月28日（木）～7月31日（日）

北海道連盟派遣団は、苫小牧～仙台をフェリーで移動して、6月に事前集合訓練、会期終了後に会津白虎隊、仕の掟などを見学して帰る事を想定しています。

〔参加者〕ボーイスカウト及びベンチャースカウトと引率指導者、奉仕するローバースカウト、指導者

〔仮申込〕平成28年1月15日（金）北海道連盟事務局必着

〔予備申込〕平成28年2月19日（金）北海道連盟事務局必着

〔確定申込〕平成28年5月20日（金）北海道連盟事務局必着

〔参加費〕スカウト、指導者共、1名15,000円〔予納金5,000円〕

## 弥栄

長岡 正彦 北海道連盟理事長は 永年にわたる  
青少年教育の功績に対して社会教育功労者として、  
11月2日文部科学大臣表彰を受けました。

斧の響き 151号（平成27年12月1日発行）

発行・印刷：日本ボーイスカウト北海道連盟／発行責任者：北海道連盟 理事長 長岡 正彦

〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条14丁目3-40 北海道ボーイスカウト会館内

Tel 011-823-7121／ Fax 011-814-9377 E-Mail bs-douren@bz04.plala.or.jp

北海道連盟公式HP <http://www.bs-douren.org/>